

明日香をよこぐる

飛鳥寺西方遺跡の調査

今回は、榎の樹の広場に相当する可能性がある飛鳥寺西方遺跡の調査成果を紹介いたします。

1. はじめに

飛鳥寺西方遺跡は、飛鳥寺の西方に広がる飛鳥時代の遺跡です。

今回おこなった発掘調査は、飛鳥寺西方遺跡の範囲と構造を明らかにすることを目的として実施しました。この調査地は、「入鹿の首塚」から南へ約90m、飛鳥寺中金堂跡（現安居院本堂）から南西へ約130mの位置にあります。飛鳥寺西方は、『日本書紀』に度々登場する「飛鳥寺西榎」の地に推定されています。この「飛鳥寺西榎」の地では、壬申の乱時には軍営が置かれ、また、蝦夷や隼人などの辺境の人々への饗宴が行われました。ほかに、大化の改新前夜に、中大兄皇子と中臣鎌足が蹴鞠を通じて出会った

場所ともいわれています。これら文献史料の調査・研究によつて、この地域には蹴鞠や軍営を営むほどの広い空間が広がっていたことが推測されています。いわゆる榎の樹の広場が飛鳥寺西にあったと考えられているのです。

2. 検出遺構

今回検出した遺構には、南北石組溝、東西石組溝、石列、土管掘形、砂利敷、素掘溝があります。

南北石組溝

調査区の東側では南北方向の石組溝を検出しました。溝の幅は約1・2m、深さ約15cmです。溝の側石は1石積みで、約60cm大の石を用いています。溝底には拳大から人頭大の底石を敷いています。時期は7世紀後半と考えられます。

東西石組溝

調査区の南側では東西方向の石組溝を検出しました。溝の幅は90cm、深さ約10cmです。溝の側石と底石は、ともに約15cm大の石を用いています。溝の底石には天理砂岩が1点転用されています。そして、溝の一部は、奈良時代に掘られた素掘溝によつて壊されています。この溝の時期は、7世紀後半以降と考えられます。

石列

東西石組溝の北側1・4mの位置で検出した石列です。約15cm大の石を用いて並べています。東西石組溝と同じく、素掘溝によつて一部が壊されています。時期は東西石組溝と同時期に造られたと考えられます。

素掘溝

南北石組溝のすぐ西側で検出した素掘溝です。幅は約3mを測ります。埋土には大量の砂礫を含んでいました。東西石組溝と石列を一部壊していることから、飛鳥時代以降の溝で、時期は奈良時代以降と考えられます。

土管掘形

調査区の東側で斜行する土管掘形を検出しました。土管掘形とは瓦製土管を埋めるた

めに掘られた溝状の掘形です。幅は1・6mを測ります。土管掘形は、南北石組溝の下に埋設されていることから、南北石組溝より古い時期に造られたと考えられます。

砂利敷

飛鳥時代当時の地表面に敷かれた砂利敷です。5〜10cm大の川原石を調査区全面に敷いています。広場の敷石と考えられます。

3. まとめ

今回の調査の結果、飛鳥寺

西門付近

から以南

では砂利

で覆われ

た広場が

広がって

いたこと

が明らか

となりま

した。こ

れらの時

期は、飛

鳥時代の

後半、つ

まり7世

紀後半代

と考えら

れます。

また、調

査区内で

は、建物

に伴う柱



今回の調査地（飛鳥寺西方遺跡）全景（南西から）

穴は確認できませんでした。このように、これまでの調査成果からみても、飛鳥寺西方地域は、建物が希薄な地域であったと考えられます。よつて、この遺跡が、「榎の樹の広場」に相当する可能性が高いといえます。今後の調査によつて、飛鳥寺西にあったといわれる榎の樹の広場が具体的にどのような姿をしていたか、より鮮明となつてくるでしょう。